
翻 訳

シュトルム『大学時代』書評⁽¹⁾

クラウス・グロート
高木文夫訳

シュトルムは彼の心情あふれる物語群の最新作を「旧来の愛情と尊敬を持って」メーリケに献呈した。我々にとって不思議なことではない、似通ったことが互いに惹かれ合っているのだ。メーリケの詩集をひもとく、例えば、直ぐ最初の数行

ああ、暗い早朝の羽毛のように軽い時間よ
如何なる新しい世界を私の中で動かすのか
不意に私が汝の中にいて存在の
柔らかき歓喜に燃えるのは何なのか⁽³⁾

この後にシュトルムの言葉を続けることはできないだろうか。

-
- (1) シュトルムの作品、ハイリゲンシュタット時代の1863年に執筆された。
(2) エドゥアルト・メーリケ(1804-1875)、南ドイツ出身で、シュヴァーベン派の詩人、代表作は『詩集』(初版1838年)や小説『画家ノルテン』(1832年)。シュトルムはボツダム時代の1855年にシュトゥットガルトにメーリケを訪れている。またメーリケ没後まもなく回想記「メーリケの思い出」(1876年)を執筆した。グロートが文中で強調している、両詩人の相違点と共通性について、この回想記でメーリケ自身も認めていたことが述べられている。この回想記については『シュトルム名作集』第6巻(日本シュトルム協会編 三元社 2013年)所収の邦訳(小嶋泰訳)参照。
(3) メーリケの詩「冬の朝 日の出前」冒頭4行。

黄金色に光が屋根に差ししかかる
雄鶏は鳴き、朝を目覚めさせる⁽⁴⁾

(『詩集』初版 62 ページ)

あるいは繊細な二つ目の詩

あれが最後だ 私が
お前と歩んだこと クレールヒェンよ
そう それが最後だ
私たちが子供のように喜ぶことは⁽⁵⁾

双方の詩人の調べに慣れたものにとってはどちらがこれを創作したのかは難題ではないだろう。この詩句はメーリケによるが、シュトルムの全物語作品の基本テーマでもある。比較のためにシュトルムの4行を対置する。

賢いわけではない、美しいわけではない、しかし私には
彼女の青ざめた顔
そして彼女のブロンドの髪
私には愛^{いと}しかった…

なおもまた子供らしいやすらぎが
離れてしまったあの日から吹き付ける⁽⁶⁾

(『詩集』27 ページ)

二人ながら郷愁の詩人である。鮮やかなかぐわしい青春時代にすべて——生きて
いることと死んだこと、人間と物事、藪と石——を包む愛情が二人をともに詩人に

(4) シュトルムの詩「朝まだきに」冒頭2行。

(5) メーリケの詩「追憶 C.N.に」冒頭4行。

(6) シュトルムの詩「ルーチエ」より。

した。それ故二人ながら対象の選択においてさえ互いに似ている。早くに没した恋人、兄妹、幼友達こそがしばしば甘い哀愁に満ちたため息が向けられた先であり、その姿に自由な創造が空想を身にまとい、昔なじみの道をさまよい歩く。

そして彼女の眼はいつも
輝く故郷を思⁽⁷⁾う

(シュトルム 32 ページ)

しかし、それ故二人は相互の故郷、ロマンチックなシュヴァルトツヴァルトと南シュレスヴィヒの波が洗う海岸のように似ていない。メーリケは「彼の川」—— エマー川を、神々しい谷間—— ウーラハの谷——「牧草地の金色に輝く牧草を、繁った木陰の土地を通り抜ける泉」とともに歌う。彼のあこがれの灼熱すべてがそこに溢れ出る。

ここに私は大声でしゃくり上げながらとどまろう
無感覚に、そしてなべてはおのれの進む道を持つ

：

そこでお前たちは皆また立ち上がり
陽を浴びた岩、昔の雲の椅子
森には重く真昼がほとんど明るくならぬところ
そして影は香り豊かな重苦しさが混じり
お前たちはこちらへ逃れた私をいまだ覚えているか⁽⁸⁾

(メーリケ 41 ページ)

そしてシュトルム——空想は彼をどこへ連れて行こうというのか。むしろなすべきことを極地トゥーレ島にまで追いやることを好む旅人に尋ねよ。彼は君たちを 2000

(7) シュトルムの詩「見知らぬ人」中の 2 行。

(8) メーリケの詩「ウーラハ訪問」の第 1～2 連。

(9) ギリシア・ローマ伝説で、極北にあると考えられた島。

年前マルセイユのギリシア人先駆者がしたことに似た描写を与えたいと思っている。一つの町が霧の中に荒涼とした原野と底なし沼のはざまに置かれている。丘は風砂以外ではなく、人々は何にもまして冷淡で散文的だ。ここではワインのようなポエジーは育たないだろう。育つのは小麦とスグリのみ。ナイチンゲールは巣にする藪も見つけにくい。

しかし、一度シュトルムが故郷のフーズムを歌うのを聞いてみよ。

灰色の海岸，灰色の海辺

そこに町はある

霧が重く家々の屋根を覆い

静寂^{しじま}を貫き海は轟く

町の周囲を単調に

森のざわめきもなく、五月になっても

間断なく羽ばたく鳥もない

渡り雁は激しく鳴き

ただ秋の夜を通り過ぎるのみ

岸辺では草がそよぐ

しかし、私の心はすべてお前を思う

お前、海辺の灰色の町よ

青春の魔法はいつまでも

笑みながらお前の上に憩う

お前、海辺の灰色の町よ⁽¹⁰⁾

「心は世界よりも広い」と別の北方の詩人、リユーベックのシュミットが言っている

(10) シュトルムの代表的な詩「町」。

る。ここにはポエジーの秘密すべてがある。湿地帯の住人はシュヴァーベンやスイスの人々のように郷愁を良く知っている。「永遠の青春の魔法」はすべての人々に同じである。この魔法によってシュトルムは己の登場人物を呼び出す、すべての物語においても。そうして同郷の人々の心を魅了するのだ。故郷の風が彼らの周りに吹く、頭上には沈黙しがちな平原が憧れる空が広がる。「遠い地平線」に己を描き、辺り一帯で蜃気楼が震えだし、同郷の人々はそっと通り過ぎ、そして悲しく沈んでゆく。彼らの中にあるのは形象というよりは感覚であり、描写というよりも色彩である。それは我々の種族の本来の代表ではない海と戦い、海からやっとのことで土地を奪い取ったフリースラントの人々の堅固な要素はそこに代表されていないし、郷愁と憧れががさつな男性の姿に寄り添うこともない——花開く乙女、ほころびる芽、老いたやもめ、孤独な曾祖母の白髪頭——それぞれが互いを新しい朝のみずみずしい早熟の赤と夕べと夢見るような月光の輝きで包み込む。それどころかそのとき気がかりな面は避けられない。詩の苦痛に北ドイツの本質を飾る道徳的な厳しさが際立ってはいない。詩人が親しい謝罪を感じながら、自らの罪により、悲劇的な結末を迎えた竹馬の友を見つめているのは自然であり、許しうることだ。それどころか本当に詩人は喜んで謝罪し、自分に苦痛を与えた者を許してもいる。

今日、今日だけ
 私はかくも美しい
 明日、ああ明日は
 なべて過ぎねばならぬ
 この時間だけが
 お前はまだ私の物だ——
 死ぬ、ああ死ぬことは
 私ひとりの身の上をなろう⁽¹¹⁾

(『詩集』 8 ページ)

(11) シュトルムの代表的な短編小説『みずうみ』（初稿 1849 年）に挿入された「竖琴弾きの少女の唄」の一節。

海や平原の美しさはローマのカンパーニアであれ、沼地や原野であれ、大気と空の間にある。通りすがりの旅人にとっての美ではない。その美は見せることもできず、一つの視^{ポワン・ドゥ・ヴュー}点に導くことも、望遠鏡で引き寄せることもできない。美は休息と滞在を要求する。最初の14日間で絶望し、ビューズムの保養地⁽¹²⁾から逃げ出そうとした画家を知っている。事情があって画家はとどまざるを得なかったので、数年後の今、遠方から思い出の中の憧れが彼を連れ戻している。砂漠のポエジー、他のあり様があるだろうか。この美しさに我らが詩人の魂は陶醉している。それは彼が我々に見せようとしていることであり、この目的には完全に達している。

シュトルムの以前の物語ではしばしばずいぶんと色彩や雰囲気⁽¹³⁾に抵抗した描写は後退している。インメンゼーとシュターツホーフ⁽¹⁴⁾は例外だが、詩集も同様である。人間の姿は私にはぼやけて見え、記憶の中で音が響くように私から離れない。遠い、深く陰鬱な鐘の音、蜂のうなる音、退いてゆく海。その中のいくらか多くの音は美しい輪郭を妨げていないように私には見える。

歌ったわ、もっとサクラソウを手折^{たお}ってちょうだい
埃^{ほこり}はもう払い落とさないで

とヘーベル⁽¹⁵⁾は言っている。我々はそれを良く知っている。だからこの日曜日の花が、甘い果実の白さがシュトルムにとって問題なのだ。そしてシュトルムはまったく危ない筆致や色彩を使う芸術家であり、一言一言が選ばれ、定められた箇所に置かれている。それ故彼が南ドイツの詩人に捧げるこの物語において、より鋭い輪郭とよりゴツゴツしたりアリティによって人物像を作り上げていることは芸術家としての意図であろう。「海辺の灰色の町」は再び香り豊かな背景になっている。「フランス人の

(12) 北海沿岸の港町、シュトルムの故郷フーズムヤグロートの故郷ハイデから遠くない。

(13) 『みずうみ』の舞台となった湖の名前。

(14) シュトルムの小説『シュターツホーフにて』(1859年)を表している。

(15) ヨハン・ペーター・ヘーベル(1760-1826)、グロートと同じように方言による詩人、代表作は『アレマン方言詩集』(1803年)および『暦物語』(1811年)、引用された詩句は出典不詳だが、原文はアレマン方言。

仕立屋の一人っ子、母親の僅かな資産にもかかわらず衣服も充分清潔に保たれている13歳の娘」が主要人物となっている。「日焼けした肌の色と大きな暗色の眼は父親が異郷の出であることを証言していた。私は彼女が黒い髪を非常に深く素朴にこめかみまで垂らし、そうでなくても小さな頭に特別に繊細な外見を与えていたことを今でも思い出す。」ダンスの時間はギムナジウムの6年生が主人公として描かれる。スケートは私たちを冬へと連れ去る。春は語り手をヒロインと情熱的に関わらせる。そして、この春は一人の心が憧れとともに鼓動し、天が幸せな心にとって聖なる大地に落ちるように描かれている。——それからようやく本書の表題が約束していることが始まり、物語は大学が舞台になる。このような経過と結末については言うべきことはない、我々が湿地帯の子供であることやそのポエジーを感じることを自ら讃える。我々自身にとってはポエジーは本書の前半で全体にとって充分である。表題が言っていない何かを読者に明かすことはしないでおう。しかし、最後まで読めば、他の楽しみを感じたとしても、詩人のこの全般的な批評に我々が詩人に対し、ここで何か特別に言わねばならぬことを見つけるかも知れない。しかし、我々が同郷人シュトルムに小文が友人らしい挨拶であることを望む。

[訳者後書き] 本稿はグロート Klaus Groth (1819-1899) のシュトルム Theodor Storm (1817-1888) の小説「大学時代 *Auf der Universität*」(1863年) に対する書評の翻訳である。初出は「アルトナ・メルクーア」1862年12月7日付である。グロートのシュトルムに対する書評としては、他に、拙訳「グロート『シュトルム全集書評』」(『香川大学経済論叢』第82巻第1・2号、2009年9月、S.161-S.168)があり、本編のほうが先に発表された。前稿で紹介したように、二人の関係はグロートがシュトルムに自作『クヴィックボルン』(1852年)の書評を依頼し、シュトルムが応じたことに始まる。時には行き違いもありながら、二人の交友は次第に深まり、晩年まで続く。シュトルムはグロートの作品については『クヴィックボルン』の他、『クヴィックボルン』第二部(18年)およびその補遺『百葉の紙片』(1854年)とがある。これらのシュトルムのグロートに対する書評については、拙訳「『クヴィックボルン』第二部」(日本シュトルム協会編訳『シュトルム名作集』第6巻 三元社 2012年)および「ク

ヴィックボルン』』と『『百葉の紙片』』（「日本シュトルム協会会報」第50号）を参照されたい。また、シュトルムは抒情詩「クラウス・グロートに *An Klaus Groth*」（1872年）を献げ、グロートの低地ドイツ語の詩の意義を評価している。この詩については訳注2の『シュトルム名作集』第6巻参照（加藤丈雄訳）。本書評を一読して感じられるのは、表題に『大学時代』があるにもかかわらず、前稿の紹介でも触れたような、詩人たちの故郷シュレスヴィヒ・ホルシュタインとの関わりであり、故郷への深い思い入れである。

訳出に当たって底本としたのは、シュトルムとグロートの往復書簡集（*Theodor Storm - Klaus Groth. Briefwechsel. Kritische Ausgabe.* Hrsg. v. Boy Hinrichs. Erich Schmidt Verlag, Berlin, 1990）の附録に収録されているもの（S. 184-188）である。